

令和 2 年度事業報告

特定非営利活動法人ゆう

令和 2 年度全体総括

令和 2 年度は、新型コロナウイルスの蔓延により、緊急事態宣言が発令されるなど、社会の様相が大きく変化しました。消毒・マスクにソーシャルディスタンスなど、新しい生活様式を求められる 1 年でした。春先の緊急事態宣言中は、ヘルパーステーションでは、必要最低限の外出にとどめるなどの対応を迫られ、通所事業所でも、分散登園や時差登園、行事の見直しなどを行いながら事業を継続してきました。また、豊川市の委託事業「叱らずに済む子育て」も ZOOM での開催を市と折衝し何とか実施することができました。

今まで、毎月 1 か所で行っていたスタッフ全体研修は、ZOOM を使い拠点ごとをつなぐ形式にして密を避けて行いました。新型コロナウイルス感染症対策 BCP を策定するなど、事業を中断することなくどう継続し続けるのか、IT の活用や集団規模の見直しなど、みんなで知恵を出し合って難局を乗り越えてきました。

NPO 法人ゆうは、スペシャルニーズのある方々とその家族が地域でありのまに自分らしく暮らしていくための取り組みを続けています。ゆうでは、障がい理解や科学的に実証されている手法を用いて、一人ひとりへの配慮や支援を行っています。年度末は、スタッフ全体研修で各事業所の実践発表を行いました。各事業所で、現場責任者やスタッフ一人ひとりが奮闘し、ゆうらしい事業が展開されていることをスタッフ全体で共有することができました。一人ひとりのスタッフが、理念や行動指針を基にして、自ら考え実践する日々の支援が、家族や本人だけでなく、法人全体の成長にもつながっています。多くの笑顔、感謝の言葉を頂くことのできた 1 年でした。会員の皆様には、毎月発行しているゆうゆう通信で活動の様子をお伝えすることができました。

短期目標に挙げていた、金屋元町と新豊町、金屋橋の 3 つの拠点を集約する新規施設立ち上げに向けて準備を始めました。設計士と現場責任者との懇談やブログの開設など、法人内外の方と情報共有しながら進めています。今年度はイベントなどが開催できず、短期目標は取り組みなかったことも多くなってしまいました。そして今後もコロナ禍での事業の継続の為に、工夫をして運営していくことが求められます。

コロナウィルスの猛威の中、コロナ差別なども話題になりました。社会全体がお互いを尊重し、尊敬し合える社会となるように、みんなが創意工夫をしながら「ありのままに自分らしく」のまちづくりを今年も進めることができたことは大きな成果です。

理事長 豊田和浩

令和 3 年 3 月 31 日

＜ゆうが活動の柱としている考え＞

理念「ありのままだに、自分らしく」

スペシャルニーズのある方の想いに沿ったサポートをします。

スペシャルニーズのある方にあたたかいまちづくりを目指します。

スペシャルニーズのある方の支援を、ご家族とともに考えていきます。

スペシャルニーズに関する情報発信とネットワーク作りをします。

スタッフ行動指針

NPO法人ゆうスタッフは以下の行動指針に沿って支援・活動を行っています。

1. 利用者・家族・スタッフ・地域の方々など、すべての人を尊敬し尊重する姿勢を持ちます。
2. 利用者のありのままを受け入れ、本人主体の支援を行います。
3. 利用者の将来を見据えた支援を行います。
4. 利用者の心の声を聞き、強みや得意を活かした安心感のあるかわり方を、本人・家族とともに考えます。
5. 自分の仕事に誇りと自信を持ち、向上心を忘れず、変化を恐れず行動します。
6. 思いやりや気配りをもって、チームで支援を行います。
7. 自分のふるまいが、あたたかい地域づくりにつながっていることを常に意識します。

令和 2 年度の事業

令和 2 年度事業は以下の体制で行った。

人づくりまちづくり部門

福祉啓発部

- 福祉相談・個別療育相談・家庭療育指導
- 講師・アドバイザー派遣
- 講演会など 福祉フォーラム
- 各種学習会・茶話会
まなびん、おうちでできるお膳立て、ペアレントトレーニング・ゆうの庵（新）
- 市民活動団体・研究会の事務局委託
自閉症啓発キャラバン Swing、穂の国 PECS サークル、TEACCH とよかわ（新）
- 行政からの委託事業 （ペアレントトレーニング、新城市保育士研修など）

余暇文化活動援助事業

- きょうだいの会
- クローバーの会（新）

直接支援部門

- ゆうヘルパーステーション （短期預かり、福祉移送、行動援護、移動支援）
- ゆうサポートセンターどーや （生活介護）
- ゆうサポートセンターとことこ （児童発達支援）
- 豊川市児童発達支援施設ひまわり園 （児童発達支援、保育所等訪問支援）＊指定管理
- ゆうサポートセンター （児童発達支援、放課後等デイサービス、保育所等訪問支援）
- 相談支援 Kids ふぁ～すと （児童相談支援）
- ゆうショートステイとれ☆きゃん （短期入所、日中一時支援）

本部事務局

- 法人事務管理

人づくりまちづくり部門

《福祉啓発部》

今年度は新型コロナの感染防止対策を行いながらの活動となった。

福祉相談・個別療育相談・家庭療育指導

ZOOMでのオンライン相談と感染防止対策をした上での短時間の対面相談を行った。

相談担当者 5名

対面 20回 オンライン 27回

講師派遣・アドバイザー事業・講演会等

行政からの委託事業に関しては、上半期に予定されていたものが一部中止になったり下半期に移動したり、緊急事態宣言でさらに延期になったりして、実施が1月～3月に集中したため、通常業務を圧迫する結果となった。一方、法人独自の事業については、年度当初から ZOOM を活用してオンラインで行った。オンラインのメリットもデメリットも感じる1年となった。

- ・新城市療育実践研修（対面）上半期の予定を繰り下げて下半期に実施
- ・新城市ペアレントメンター研修（対面）
- ・豊川市「叱らずにすむ子育て」（ZOOM）当初5回の予定を前期中止して2回開催
- ・豊川市「ティーチャーズトレーニング」（対面）下半期に繰り下げて実施
- ・豊川市子育てネット「子育てサポーター養成講座」（対面）
- ・宮城県ハッピーピース「こんな風に育ってきました」（ZOOM）
- ・知多圏域児童発達支援事業所向けティーチャーズトレーニング（ZOOM）
- ・大阪チャオネット ボランティア講座（ZOOM）
- ・行動援護従業者研修（対面）
- ・児童発達支援管理責任者研修（対面&ZOOM）更新研修（ZOOM）

学習会・茶話会・交流会

まなびんは緊急事態宣言中は講義動画を youtube にて配信と案内していたが、中止となり、以後 ZOOM に切り替えたが参加者がなく、ゆうの新人研修のみの実施となった。

ペアレントトレーニングについては、オンラインで開催した。初めて ZOOM を使う受講者には事前に説明と練習の時間をとったことで、申込者全員が受講することができた。参加費については5回分を一括でいただき、やむを得ず欠席した場合は youtube での見逃し配信を活用したが、参加者からの評価も良く、満足度も高かった。

また、今年度より活動を開始したゆう親の会「クローバーの会」主催で「ゆうの庵」を対面にて開催した。「茶話会をしよう（ひまわり園卒園児向け）」「小学校ってどんなところ？」の2回行うことができ、次年度への活動の足がかりとなった。

市民活動団体・研究会の事務局委託

今年度より新しく TEACCH とよかわ（TEACCH プログラム研究会愛知県支部の地区別学習会）の事務局委託を受諾した。

➤ 自閉症啓発キャラバン Swing

ZOOM での定例会（毎月）と動画による啓発活動を行った。

福祉実践教室担当者向け ひまわり園保護者向け 延べ参加者 95 名

➤ 穂の国 PECS サークル

近隣の感染状況に合わせて、ZOOM と対面を使い分けて、定例会を開催した。

5 月（ZOOM）、7 月（対面）、9 月（ZOOM+対面）、1 月（ZOOM）

➤ TEACCH とよかわ

8 月より ZOOM にて隔月で定例学習会 2 月に外部講師による研修会を開催。

見逃し配信あり 登録者 45 名 4 回の延べ参加者 120 名

《イベント部》

きょうだいの会

障がいや発達につまづきのあるきょうだいがいる子どもたちが、普段できないいろいろな体験をし、きょうだいのことを普通に話せる友達作りを目的としている。今年度は感染防止対策を行い、年 2 回開催した。

- ・ふるさと公園であそぼう
- ・観音山へハイキングに行こう

直接支援部門

公的支援の直接支援部門の報告は各事業所より以下の通り。

事業所名	ゆうヘルパーステーション	管理者	浅田 多世
サービス提供責任者	門之園 由美	現場責任者	門之園 由美
令和２年度の実施総括 コロナウイルスによる外出自粛や緊急事態宣言の発令を受け、お出かけをお休みされる方や目的地が休業のため行き先を近場に変更される方も多く、利用件数が例年の半分程になってしまう月もあった。 例年に比べ利用件数が毎月 10～20 件程少ない状況となった。お出かけ先は、極力密を避けた屋外施設や混雑を避けた時間帯を提案する等工夫をしながら行ってきた。制限がある中でのお出かけではあったが、“ヘルパーとのお出かけを楽しみにしていた” “久しぶりにお出かけできて良かった” という声を頂けた。在宅の方についても、外出の機会を作ったり、ヘルパーと過ごす時間を延ばしたりと大きな 1 歩を踏み出すことができた。また日常の業務についても、空いた時間を使って書類の整理や自立課題の作成・改良などに取り組むことができた。			
今年度の成果	・コロナウイルスの影響で行き先が休業になってしまった方がいたが、それがきっかけで新しいお出かけ先を増やすことができた。 ・在宅の方の活動に自主製品のリボン作りを取り入れたことで、完成した商品を外部（どーや）に届けに行くという流れでヘルパーと外出することができた。1 度ヘルパーとの外出経験をしたことで、後日に事業所（どーや）の見学に繋げることもできた。ご家族の方からも「ここ数年家族以外の人と出かけることが出来ていなかったけど、大きな 1 歩が踏み出せました。すごい！」と喜びの声を頂けた。 ・本部事務所に在宅の方が製作したくすみボタンを設置・販売したことで、売り上げの一部を工賃としてお渡しすることができた。 ・コロナ禍で支援件数が減ってしまったが、空いた時間を使って各スタッフが記録整理や自立課題の作成など積極的に取り組むことができた。 ・法人内の生活支援部で、利用者の状況・対応方法を共有することで、大きな混乱なくお出かけすることができた。		
事業所の課題	・コロナ禍でお出かけがしづらい状況が続いており、例年通りの収益が確保できていない。 ・コロナの影響もあり、1 年以上利用がない方がいるが現状や今後の利用についてのお話ができていない。 ・業務分担はしているが、スタッフによって余裕があったり、追いついていなかったりとばらつきがあるため見直しが必要。		

事業所名	ゆうサポートセンタードーヤ	管理者	豊田 和浩
サービス管理責任者	岡部 祥子	現場責任者	岡部 祥子
令和２年度の実施総括 週５日利用の利用者が一人増えたが、部屋の構造・スタッフ配置を見直し、受け入れることが出来た。その方も１年間休むことも大きな崩れもなく通所され、他の利用者也影響なく過ごすことが出来た。祝日営業も年間の中で数日行い、長期休みにならないように配慮したことで、どの利用者もご自宅で大きな崩れもなく過ごすことが出来た、と今回もご好評の声を頂いた。他事業所の利用や、他法人と併用している方については、ネットアプリを利用することで時差なく利用者の様子を共有することが可能になった。そのため、利用者の不安や変化にすぐに対応をすることが出来たように感じる。また、今年度は自主製品作りにもいくつか挑戦した。にじみ絵を使ったポチ袋・うちわ、粘土製作によるマグネット、カレンダー作りをし、販売。まずは各部署や関係施設、知人の店など身近な所での販売のみであったが、売り上げをあげることが出来た。			
今年度の成果	・引き続き祝日営業を数日行うことで、年間通して休みが続くことでの不安定を招くことなく、利用者が安定して過ごせたことで、ご家族も安心して過ごすことが出来たとのお声を頂いた。 ・自主製品作りに取り組んだことで、利用者への作業提供・工賃を増やすことが出来た。また、自主製品を販売することで、社会参加にもなり地域の方々への利用者のイメージアップにも繋げることが出来た。 ・コロナ禍であり、例年行っていたイベント・外食が行えなくなってしまったが、その中でもスタッフが知恵を絞り、可能なイベントを考え実施したことで、利用者の楽しみも継続して提供することが出来、スタッフも利用者への理解を深めることが出来た。		
事業所の課題	・送迎に入れるスタッフが勤務時間の関係で限られているので、一定のスタッフに負担がかかってしまっている。送迎中のトラブルもあり、一人で運転をしつつ、利用者支援にも当たらなければならないため、負担が大きくなってしまっている。 ・日中は利用者があり、朝夕は送迎に出てしまっているため、スタッフミーティングの時間が取れていない。スタッフの意見を聞いて決める、という機会が少なく、みんなで支援を考えていく、という気持ちになりにくいように感じる。 ・「音」が課題となっている利用者が多くいるが、建物の構造もあり、なかなか改善出来ず、利用者一人一人が安心できる室内環境には整えられていない。そのため、利用者が事務所で過ごすことも多くあり、スタッフの休憩がしっかり取れていないことも課題である。		

事業所名	ゆうサポートセンター とことこ	管理者	十都 敦子
児童発達支援管理責任者	十都 敦子	現場責任者	十都 敦子
令和２年度の実施総括 令和２年度は、利用児１８名（内、年長児６名、年中児８名、年少児４名） 今年度も２クラスに分け、少集団（５～６名）での療育を行った。今年度は、両クラスともに忍者修行を取り入れた。第１回目の緊急事態宣言において、保護者に望ましい形をアンケートでとり、通常通りの時間で、人数制限を行い、サービス提供を行った。自宅待機の利用児の保護者に対しては、電話で様子を共有したり、保護者や子供の困り感に対する助言を行い、関係の継続、ご家庭での生活の支援を行った。 例年行っていた行事も、再度、ねらいを確認した上で、中止したもの、参観の人数を制限して行う等の対応を行った。			
今年度の成果	★一人ひとりの特性に応じた対応を丁寧に行うことで、誤学習から学びなおすことができたり、生活のしやすさにつながった。また、保護者と共有することで、ご家庭での生活のしやすさにもつながるケースが多くあった。 ★子どもが持っているスキル、興味関心を活かしたコミュニケーションを大事にすることで、確実なコミュニケーションがとれる様になり子ども達の意欲につながった。 ★好きな活動を共にし、ご褒美をモチベーションに頑張る経験を積み、クラスごとに子ども同士が意識し合う関係性ができ、対大人をベースに、対子どもとの関係づくりも豊かにできた。 ★運動会を日常的に取り組んでいることを発表する機会として位置付けたことで、子どもがより自信を持って取り組み、スタッフの準備もやや短縮することができた。 ★担当が責任を持って担当児の支援、ご家族支援を行えたことで、保護者と情報共有ができる機会を多く取ることができた。 ★保護者会では「一人でできるを増やそう」の取り組みを行い、ご家庭での子供の見方、関わり方を捉えなおし、日常の設定を考えていくきっかけ作りができた。		
事業所の課題	・アセスメントを行うシステム作り、アセスメントを元にした支援計画作成＆実践の流れの構築。 ・残業時間を減らすため、スタッフ同士のスムーズな情報共有のため、情報共有のシステムの見直しと構築、書類作成の効率化を行う。 ・子ども同士の相性、誤学習による不安さから安心できる場に変え、個々の学びを保障できる場、設定、関係作り。そのことを保護者とも理由と共に共有していく。		

事業所名	豊川市児童発達支援施設 ひまわり園	管理者	高瀬 佐代子
児童発達支援管理責任者	森川 せつ子 丸山 尚美	現場責任者	高瀬 佐代子
令和２年度の実施総括 令和２年度は大きく分けて５つのコース（２歳児、２歳児待機、３歳児、園併用午前、園併用午後）で療育を行った。大がかりな改修工事が入り、活動や環境の工夫をして事業を進めてきた。また、コロナ禍で様々な面で制限があったものの、感染予防対策をしながら療育を休止することなく事業を進めることができた。 通園期間の中で、子どもには様々な活動の機会を作り、保護者には必要な学びと情報提供を行った。保護者と子どもの現状や課題を共有し、一人ひとりの保護者に合わせ丁寧に関わることで、自分の子どもに合った子育ての気づきや、少しでも育児に前向きになれるような環境を提供することができた。 また、学習会や茶話会では同じ立場で話せる環境作りをし、保護者同士のつながりを作るとともに、発達や子どもに関わるコツを学ぶ機会を作り、進路や療育機関などの情報提供を行った。 保育所等訪問では、訪問時にお子さんの心の声や今後の支援の方向性について共有できた。			
今年度の成果	・緊急事態宣言発令時には、ご家族の協力を得て、時間・人数を制限し、３密を避け療育を行った。また改修工事では、活動や環境の工夫をし、できるだけ通常通りの経験ができるように努めた。 ・各コーススタッフがチームで協力し、様々な経験の機会を子どもたちに提供した。通年コースでは、季節に合わせた活動や誕生日のお祝いを取り入れ、地域の集団で経験するような活動の場を提供した。 ・業務分担の見直しを行い、業務の引継ぎや効率化を図った。 ・保育所等訪問支援事業では、訪問時に課題や対応について共有し、必要に応じて会議やティーチャーズトレーニング講義を行った。		
事業所の課題	・子育てにおける情報の偏りや人間関係の希薄さがある中で、子どもとどう関わったらよいか、分かりづらい保護者が増えている。スタッフが具体的な子どもとの関わり方、遊び方の見本を見せながら伝えていく。 ・午後コースではより対応にコツのいるケースや、母との関わりがうまくいかないケースもある。特性理解・ペアトレの対応・アタッチメント形成などを視野に入れながらスタッフ間で共有し対応をしていく。 ・令和２年度は園併用のコースが増えた。保育所等訪問・家庭連携加算で、併用先との連携を密に行っていく。		

事業所名	ゆうサポートセンター いまーじゅ	管理者	大橋 美保
児童発達支援管理責任者	大橋 美保	現場責任者	大橋 美保
令和２年度の実施総括 コロナ禍において、感染症対策を行い、支援提供を行った。特に、緊急事態宣言においては、保護者に望ましい形をアンケートでとり、希望に応じて、通常通りの時間でのサービス提供や、親子ごとに時間を分けてサービス提供を行った。感染を恐れて利用を見合わせている親子に関しては、電話で様子の共有や必要事項を連絡し、関係が継続でき、その後のスムーズなサービスの利用につながるように支援した。			
今年度の成果	・子どもの『できた』『よかった』『分かった』の経験を作るために、常に子どもの心の声を保護者へ解説したり、保護者の気持ちに寄り添うことを意識し、相談内容や家庭用プログラムに保護者が記載した言葉の１つ１つを想像し、丁寧な聞き取りや相談を行った。 ・昨年からの課題となっていた書類の見直しを行い、効率的にできる形式を整え、親子をスタッフの担当制にしたことで、業務の効率化につながった。 ・保護者に、子どもとの関わり方をより練習していただくために、保護者の様子に合わせて、成功体験や気づきが得られる場面を検討・設定し、取り組んでもらう機会を作った。 ・子どもたちがさまざまな経験を積めるように、クリスマス会、避難訓練、節分、卒業のおやつパーティーなど、さまざまな活動について、子どもたちそれぞれ個別の「できること」「分かること」に合わせて計画・実施し、楽しむ機会を作った。		
事業所の課題	・多機能型の事業所ゆえに、スタッフの業務分担が困難で、負担がかかる。 ・いまーじゅだけの単独通所、児童発達支援事業所との並行通園、保育所等への並行通園など、さまざまなニーズのある親子が通い始め、保育所等訪問支援の必要性が出てきた。一方で、スタッフの人員が少なく、どの程度対応できるか不透明。業務の効率化のための、記録等書類の効率化を引き続き進めていく。		

事業所名	ゆうサポートセンター ほっとそと	管理者	大橋 美保
児童発達支援管理責任者	大橋 美保	現場責任者	大橋 美保
令和２年度の実施総括 今年度はコロナ対策のため感染症対策を行って支援を実施した。特に緊急事態宣言のため５月までは小中学校が休校になったが、ほっとそとは通常通りに開所した。感染の恐れから利用を自粛する児童もいたが、家庭と情報共有を行い、必要に応じて相談の時間を設けた。外出活動を事業所内での活動に変更したり、外部とのやりとりがあるイベント活動を保護者にアンケートをとり、感染対策を行いつつ実施する対応を行うことで、有効に活動できる機会を作った。２年度は、卒業児：３名、３年度の継続利用児：３１名（内隔週利用２名）。			
今年度の成果	・氷山モデルや応用行動分析学、自閉症スペクトラムの特性理解についての研修を行い、かつ、カンファレンスで困り解消シートを活用したり、行った支援についての検討を詳しく行うことで、スタッフが、自分の行動一つ一つがどのように子どもの行動に影響を与えたかについての理解を深めることができ、より子どもの行動を冷静に見て分析し、褒める意識が根付くことにつながった。 ・自立課題やトークンのごほうびグッズについて目的と設定の見直しを行い、再構造化に着手し始めた。玩具や遊びの一覧表を作成したり、必要な構造化を個別に行うことで、子どもたちが自分で適切な行動に気づき、自信につながる支援を提供できた。 ・防災グッズの検討やエリアについて検討し、より機能的な設定に整えた。 ・経験した活動や購入した駄菓子の人気ランキング、さまざまなトッピングの仕方の写真などを掲示することで、他者との違い、同じに気づく機会を多く作った。		
事業所の課題	・長期休暇の間はサービス提供時間が長いため、準備や片付け、事務作業、スタッフの休憩などの時間の確保ができないことがある。 ・興味関心の類似性から、同年齢の児童を同日に受け入れることがより望ましいと考えられるが、低年齢児童のモデルとなる児童がいなくなったり、より支援が必要な低年齢児童が同日利用になると、今のスタッフの人数では不足するために難しい。 ・保護者に対しての相談への対応が、送迎の情報共有時には時間が足りなくなったり１人への対応に時間がかかり他の保護者への対応が遅れてしまうことがあった。また、個別の相談の周知がし切れず、限られた人の利用となってしまった。 ・集団活動にはまだ参加が難しく、大人との個別の関わりや経験をすることにニーズがある児童にとっては、ほっとそとの枠組みの中ではニーズを満たしきれず、受け入れが難しい。 ・民家のため、個別に落ち着けるエリアや力を発散させる場所の確保が困難。		

事業所名	ゆうサポートセンター じょいん	管理者	大橋 美保
児童発達支援管理責任者	大橋 美保	現場責任者	太田 章乃
令和２年度の実施総括 令和２年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、学校が長期間休校の為、２か月程訪問できなかったことに加え、昨年度の反省を活かし、一回の訪問に行う訪問児の数の整備を行って先生とのコミュニケーションの質・量の維持を図った結果、訪問件数は昨年度より下回った。しかし、小学校対象に行った年度末のアンケートでは、じょいんの訪問支援が「役に立った」が９割を超え、頂いたコメントからもじょいんの支援が役に立ったといったお声を頂き、限られた訪問件数でも一定の質を保って支援を行うことができたと考えている。その一方、役には立ったと回答されているものの、訪問回数が多いと記された回答もあり、訪問児あたりの訪問回数をこれ以上増やしていくことは受け入れ側の学校としては難しそうな様子も感じている。			
今年度の成果	今年度の重点目標から、 「学校再開後は必要な訪問が確保できるよう努め、小学校との連携を丁寧に進めていく」：学校再開後に訪問をお願いした時には快く受け入れて頂けており、またアンケートの結果からも小学校との連携は強化できたと考えている。 「学校教育課との連携強化」：昨年度、新しく担当窓口の先生が以前じょいんの訪問支援でもお世話になった先生だったことが幸いし、こちらの状況をよく理解を示してくださったり、学校教育課からもじょいんにご連絡を頂いたり、学校教育課の方から保育所等訪問支援が学校でスムーズにいく様、校長会などで働きかけてくださるなど、例年以上に連携強化が図れた一年になったと考えている。 「訪問支援のマニュアル作りを進めていく」：訪問支援に必要な書類の流れなどのシステムに関しては合理化が図れたものの、一人事業所ということもあり、マニュアル作りが後回しになってしまい、昨年度は進められておらず、反省点に挙げられる。		
事業所の課題	・ 今後何がいつどうなっても大丈夫なように訪問支援のマニュアル作りを進めていく。 ・ 継続した訪問支援の必要な子どもの訪問回数について、各学校との同意形成を図る必要がある。 ・ 学校依頼の事業でないため、支援が必要なお子さんでも先生のニーズが薄い、もしくは無い場合に、現状の共有しかできていない現状がある。		

事業所名	相談支援 Kids ふぁ～すと	管理者	荻野 ます美
_____	_____	現場責任者	荻野 ます美
令和2年度の実施総括 ★計画相談 新型コロナの感染拡大のためご自宅への訪問や事業所への訪問が制限された時期があった。3月末から5月初旬まで学校が休校になったことによる子どもたちの不安や保護者の疲労が予測されたため、電話やZOOMにてお話を伺った。モニタリング回数を増やして対応をした結果、当初の計画の1.6倍の実績となった。 ZOOMでの面談に最初は戸惑いがあった方もすぐに慣れて、安全を確保しながら気持ちのいい環境でお話を伺うことができた。下半期は、緊急事態宣言が解除されている期間については保護者にオンラインかご自宅訪問かゆう本部での聞き取りかの3択から選んでいただき、実施した。 事業所モニタリングは事業所ごとに対応が異なっていたため、事前に細かく確認してから行った。 上半期は電話での聞き取りが多くなったが、下半期は受け入れOKの事業所が増えたので感染防止対策を行って訪問させていただいた。 ★他機関との連携 児相（児童相談センター）、学校、福祉課、子育て支援課、基幹相談支援等と連携をして対応する必要があるケースが複数あり、学校や行政とは連携がとれ協力して対応することができたが、児相とは協力体制を築くことができなかった。また、個人情報保護範囲が厳しい要対協（要保護児童対策地域協議会）の本会議からは担当するお子さんの情報が得られない中で個別支援会議には出席して具体的な支援方針を出さなければいけない場合もあり、状況把握に工夫のいるケースもあった。 ★権利擁護 支援学校で不適切ケア（行動制限）のケースがあり、学校と話し合いを重ね、対応を検討していただいたが、なかなか改善が難しい状況となった。事業所の協力もあり高等部2年で退学し、生活介護へ移行することができたが、保護者より「恨みも後悔もなく感謝もありつつ学校を終了することができた」との話があり、学校側からも高評価をいただいた。			
今年度の成果	・計画作成～担当者会議～モニタリングまでを行うことができる相談員が育った。 ・モニタリング回数を増やしたため、収入が当初の計画の1.6倍となった。 ・ZOOMによる相談やモニタリングの体制が整った。 ・虐待ケースからの児者切り替えの移行支援をスムーズに行うことができた。		
事業所の課題	・お子さんの最善の利益を保证するための児相および要対協とのかわり方が難しい ・インテーク（初回面談）でのスクリーニングや基本相談が担当できる相談員の育成 ・児童発達支援事業所の増加によりコーディネートに迷うケースが増えていること		

事業所名	ゆうショートステイ とれ☆きゃん	管理者	浅田 多世
_____	_____	現場責任者	豊田 和浩
令和２年度の実施総括 とれ☆きゃん５年目となり、５名のスタッフで短期入所・日中一時支援を行った。また、生活支援部としてヘルパーステーションや他部署からの応援を受けながら受け入れを行った。 短期入所では、定期利用者１２名を受け入れながら、新規の受け入れや体験の受け入れを行ってきた。 日中一時支援では、小中学生で放課後等デイサービスを利用していない方を対象とし、通常３名、長期休暇には７名の利用があった。コロナウィルス感染症の休校などにより平日の受け入れ枠を増やして対応するなど、スタッフの負担も大きくなることがあったが、利用者が安定的に過ごすことができるように環境等の調整を行って受け入れを行ってきた。中には、入院、学校の中退など、過ごす場所での環境が整わずに受け入れを行う利用者もいたが、大きな不適応を起こさず利用できた。			
今年度の成果	・ コロナ禍での休校や緊急受け入れに対応することができた。 ・ 短期入所利用者の安定的な受け入れを行うことができた。		
事業所の課題	・ 宿泊勤務のできる職員の確保・長期休暇含む日中一時の職員配置 ・ 変則的な勤務であることから、カンファレンスやミーティングの時間の確保 ・ 利用者の障害特性に合わせた支援(活動)のブラッシュアップ		

本部事務局 担当 浅田多世

法人運営のため、総会、理事会等の準備・運営を行った。法人の事務局として会員の管理、会報の発行、法人内の経理・労務管理などを行った。

- 現場責任者会議では、議事録を作成し出席できない者への共通理解を図った。
- 新型コロナウイルス関係の休業などの対応を行った。
- 社内の情報共有ツールをホットビズからサイボウズ・キントーンへの切り替えを行った。
- 特定処遇改善の加算取得を行った。

常勤兼務 1 名、非常勤専従 2 名

会員動向

令和 2 年度会員の動向は以下の通り。（令和 3 年 3 月 31 日現在）

近年会員数の減少がみられるため、ゆうの活動を知っていただき、会員仲間を増やしていくことが課題である。

なお、公的な福祉サービスのみの利用者は会員数に含まれていない。

正会員	31 名
利用会員	109 名（個人会員 77 名 家族会員 22 名 団体会員 10 団体）
賛助会員	47 名

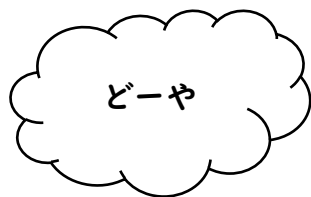
会議等の開催

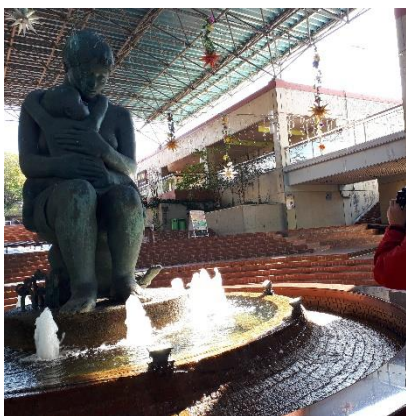
理事会の開催	5 月 18 日、11 月 26 日、3 月 23 日
総会の開催	5 月 29 日

委員会

研修委員会	スタッフ全体研修の内容の検討、及び準備等を行った。
安全衛生委員会	アンケートの実施を行った。
権利擁護委員会	現場責任者会議で権利侵害報告書の検討。虐待防止研修の実施。
防災委員会	防災備蓄品の購入を行った。

令和2年度のゆうのなかまたち





ヘルプ



いまーじゅ



ひまわり園



とことこ

